

才工

尾上遺跡発掘調査報告書

— 東浅井郡湖北町所在 —



1985

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

尾上遺跡発掘調査報告書

— 東浅井郡湖北町所在 —



1985

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

琵琶湖の湖辺には数多くの遺跡の存在が知られております。これらの遺跡はいにしえ人の英智の結集であり、現代に住む我々の生活にも多くの示唆を与えてくれるものであります。昭和59年度に湖北町尾上地先に湖岸堤管理用道路の建設が予定されたところから水資開発公団と協議し、発掘調査を実施いたしました。本書はその調査成果を収めたものであります。今回の調査が、いにしえ人の生活環境と現代の生活環境との相違を考える上で幾分かでも寄与するところがあれば幸いです。

最後に調査関係者の尽力に対し、厚く感謝いたします。

昭和60年3月

滋賀県教育委員会事務局

文化部文化財保護課長

市 原 浩

例　　言

1. 本書は、水資源開発公団の実施する湖北町尾上地先の、湖岸堤管理用道路建設に伴う尾上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、「湖岸堤管理用道路（尾上その1工区）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査」として、水資源開発公団からの委託を受けて、滋賀県教育委員会が実施した。
3. 調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、滋賀県文化財保護協会技師奈良俊哉を主任調査員に得て実施した。
4. 調査・整理にあたっては、以下の諸氏の参加と協力を得た。
渡部俊哉、山田勝彦、赤山佳宏、白江人智、松林宏典、奥谷聖子、佐々木尚子、森澤史（関西学院大学考古学研究会）、前角和夫（奈良大学）、寿福滋（写真）。
5. 本書は、奈良俊哉・兼康保明が執筆した。
6. 調査実施にあたっては、地元湖北町教育委員会ならびに同委員会技師山崎清和氏から格別の配慮を賜った。記して厚くお礼申しあげたい。

目 次

序

例 言

第 1 章 はじめ 1

第 2 章 調査の経過 1

第 3 章 調査の結果 2

(1) 基本層位

(2) 木製品出土状況

第 4 章 出土遺物 3

(1) 木製品

a、人形代 b、馬形代 c、斎串 d、その他

(2) 土 器

第 5 章 結 語 7

図版目次

図版一 尾上遺跡全景

(上) 調査前風景(北側より)

(下) 上層部掘削作業風景(南側より)

図版二 尾上遺跡調査状況

(上) 中層部掘削作業風景(南側より)

(下) 中層部掘削作業風景(北側より)

図版三 尾上遺跡遺物出土状況

(上) 下層部掘削作業風景(北側より)

(下) 木製品出土状況(北側より)

図版四 尾上遺跡南側壁面

図版五 馬形代・人形代赤外線写真

図版六 遺跡位置図

図版七 尾上遺跡トレンチ配置図

図版八 木製品実測図

挿図目次

第1図 黒色土器概実測図 6

第2図 人形代・斎串・馬形代出土分布図 8

第1章 はじめに

東浅井郡湖北町尾上からびわ町早崎にかけての湖岸線には、尾上浜遺跡、余呉川河口遺跡、尾上遺跡、今西湖岸遺跡、延勝寺湖底遺跡、早崎遺跡など湖岸から湖中にかけて、縄文時代～平安時代の遺物が散布している。

今回調査を実施した尾上遺跡は、湖北町尾上地先に所在し、余呉川河口の尾上港の南約2km程の湖岸一帯を占めている。遺跡は、余呉川の形成する三角洲の先端部に立地し、現在の集落は各々微高地に点在している。

第2章 調査の経過

今回の調査は、水資源開発公団が実施する湖岸堤管理用道路尾上その1工区建設に伴う事前発掘調査である。尾上遺跡の発掘調査は昭和58年度より実施されており、昭和58年度に行われた調査では、上下2層の文化層が確認されている。上層では、標高820m付近で近世のものと考えられる石敷や瓦敷の遺構が検出された。また、下層では、人形や斎串など祭祀用の木製品が多量に出土している。^①今回の調査地区は、昭和58年度の調査地区の西側に隣接しており、前回と同様な遺構や遺物の検出が予測された。

調査地は、かっては湖辺の湿地帯で、しかも余呉川の形成した三角洲の先端部にあたることから、多量の出水が予想されたため、調査範囲（15m×30m）を鋼矢板で囲み、その中を発掘した。

調査は、鋼矢板の打込みの終了した昭和59年7月23日より開始した。まず、バックホーで表土より順に一層ずつ除去し、遺物包含層の直上より手掘りで掘削を行った。結果として遺構は検出されなかったが、遺物包含層内の木製祭祀具の出土状況については、その都度実測し記録化した。また、土層の堆積状況は、調査区の南側のセクションを基本とし、東と西のセクションで補足した。昭和59年9月23日に、現地での一切の調査は終了した。

第3章 調査の結果

(1) 基本層位

調査地は、パイロット道路のため約2m盛り土がなされていたので、まずその除去から作業を開始した。

設定したトレンチで見られた層位は、どの層も一見水平な堆積を示しているように見えるが、実際は東側が高く、西側に傾斜している。また、同一層中に、細分可能な層の厚さの薄い層が幾層も含まれているが、今回の調査では特に細分はしなかった（図版4）。

第1層 灰色砂礫層。厚さ約20cm程の堆積で、部分的にパイロット道路建設時の搅乱がみられた。第1層は、ほぼ水平な堆積である。

第2層 茶褐色粘質砂層。厚さ約50cm程の堆積で、硬くしまった層である。東側が約5cm程高く、西側に傾斜している。約3cm程の厚さをもつ灰色砂層が間層として認められる。

第3層 淡茶褐色砂礫層。厚さ約30cm程の堆積である。第2層と同様に、第3層も東側が約5cm程高く、西側に傾斜している。第3層には、流路状の窪みになった層が認められる。この窪みには、薄い茶褐色砂層と茶褐色砂礫層が堆積しており、ここから木製品が出土している。

第4層 茶褐色砂層。厚さ約50cm程の堆積である。第4層上面の高さは、ほぼ同じであったが、間層として厚みの薄い淡茶褐色砂層が入っている。この間層は東側が高く、西側が低いもので、沖から波などの影響をうけて堆積したものではないかと考えられる。

第5層 暗茶褐色砂礫層。厚さ約20cm程の堆積である。第5層は、第6層が西側に約20cm程落ち込んでおり、この落ち込みに堆積したものである。上面では東側が約10cm程高く、西側に傾斜している。第5層も茶褐色砂層と互層になっている。ここからは、黒色土器の塊が1点だけ出土している。

第6層 暗灰色砂層。約30cm程掘削した。硬くしまったやや粘りのある砂層である。この面の落ち込んだところの上面で、標高815mであった。この層は、東側より5m程のところより、西側にむけて約20cm程落ち込んでいる。旧浜堤部、もしくは三角洲

状の先端にあたるのではないかと考えられる。また、第6層では設定したトレンチの中央から西側にかけて、多数の木製品が出土している。

(2) 遺物出土状況

今回の調査で出土した遺物は、第3層と、第5層、第6層からである。このうち、第3層の遺物は近世のもので、下駄などの木製品を中心を占め、陶磁器類はいずれも小破片であった。また第5層からは、平安時代前期の黒色土器が出土したが、わずか1点のみであった。ここでは遺跡の中心となる、第6層の木製品の出土状況についてみてみよう。

第6層上面では、すでに述べたように、東端より5m程のところで西側に落ち込んでいる。この落ち込んだ第6層の上面より木製品が出土した。出土した木製品は、人形代、馬形代、斎串、箸、棒状具などであるが、これらはほぼ同一の高さで出土している。図版八は、人形代の出土状況をドットで表したものであるが、これを見ると各出土位置は直径10m程の範囲内に、あたかもまとまりを示すかのようである。また、人形代の中には、何枚か重なりあって出土したものもある。これらの木製品が出土した高さは、標高818mである。さらに出土した人形代や馬形代の検出時の頭位方向を計測したが、分類できるほどのまとまりではなかった。以上のことからみると、今回出土した木製品の出土状況は、出土地点にある程度のまとまりがあるものの、方向性については無秩序であり、一度に流れ着き堆積した可能性がうかがえる。

第4章 出土遺物

(1) 木製品

a、人形代

人形代は破片も含めて、全部で10点出土した。①、②は全形をとどめており、①は全長15.7cm、幅2.2cm、厚さ3mmである。顔は墨がとんでいるがその痕がよく残っており、頭、眉、目、鼻、口が描かれていた。②より目が大きく描かれているほか、全体に写実的である。③は全長16.0cm、幅1.6cm、厚さ2.5mmである。顔は、眉、目、鼻、口を墨で簡略に描く。また、両肩と股に、墨で点をつけている。両手は、欠けて無い。④は残存長16.7cmで幅2.2cm、厚さ3.5mmである。頭部は面取りが施され丸味

を帯びており、肩部の切り込みは小さくなっている。手部の切り込みは不明瞭なものであるが、足部については他の例と異なり、幅が広いものとなっている。また、胸部を表わすような曲線が手部の切り込み付近より足部まで続いている。④は残存長136cm、幅2.6cm、厚さ2mmである。頭部は残存状態が悪いが、頂部に、鳥帽子を作り出しているものである。⑤は全長約120cm、幅2.1cm、厚さ2.5mmで、足の先端を欠くものの全形をとどめており、股部に切り込み痕が認められる。⑥は全長12.0cmで幅2.0cmを残し厚さ4mmを測る。頭部は磨滅して丸味を帯びている。脚部は左のみ残っており、腕部の切り込みも一部残るだけである。⑦は残存長10.7cm、幅1.8cm、厚さ2.5mmである。頭部は面取りが行われ、丸い形状を作り出している。腕は欠損しているが、つけ根の切り込み痕が残る。⑧は残存長9.6cm、幅2.2cm、厚さ3mmである。頭部先端は三角形状を呈する。腕部の切り込みは痕跡を認める程度で、股部の切り込みについては不明瞭である。⑨は頭部から肩部にかけて残存し、残存長5.6cm、厚さ2.5mmである。頭部先端を欠くが、三角形をした一般的な頭部であろう。⑩は頭部のみ残存するもので、残存長2.1cm、幅2.1cm、厚さ2mmのものである。頭部は、先端が三角形を呈するものである。

b、馬形代（⑪）

全長149cm、幅2.9cm、厚さ1.8mmである。頭部には、馬の横顔が墨で描かれており、口の部分を表わすため切り込みがある。また、胴部には鞍を表わしたものであろうか、側面の一方に大きく切り込みが施されている。尾部は、多少磨滅を受け丸味を帯びてはいるが、丸くなるように面取りを行った痕跡も認められる。

胸部の表面には、「黒毛□」の三文字が墨書きされている（□内は抜か）。

c、斎 串

斎串は、破片も含めて10点出土した。⑫は、全長35.0cm、幅2.1cm、厚さ3.5mmで、7段の切り込みを持つものである。完形品ではあるが磨滅した部分もあり、全体的に丸味を帯びている。⑬は、残存長166cm、幅1.8cm、厚さ4mmで、頭部からの切り込みが左右ともに欠損した状態である。頭部先端は、磨滅のために丸味を帯びている。⑭は、残存長168cm、幅1.6cm、厚さ3mmで、腐蝕しているが、頭部をわずかに残すようである。⑮は、全長114cm、幅2.0cm、厚さ3mmで、頭部より切り込みを入れたものであるが、頭部先端は、左右とも欠損が生じており、切り込みは残っていない。⑯

は、残存長6.3cm、幅1.5cm、厚さ4mmで、先端部のみ残存する。切り込みが左右にわずかに残っているが、対称的な位置はない。**⑩**も先端部のみ残存するものである。残存長6.9cm、幅2.0cm、厚さ3mmで、先端部より5cm下にわずかに切り込みを入れている痕跡が認められる。**⑪**は、残存長10.2cm、幅1.8cm、厚さ2mmで、上半は欠損して残存していない。**⑫**は、胸部のみ残存する。残存長7.2cm、幅1.7cm、厚さ3.5mmである。**⑬**は、残存長4.1cm、幅1.5cm、厚さ4mmである。畜串の下端部と考えられる。先端部はきれいに削られている。

d、その他

塔状木製品（**⑭**）

全長6.5cmである。塔の水煙を思わせる形状で三段になるものである。用途については不明である。全体のケズリは丁寧なものでありさらに下方に続くものであろう。

股状木製品（**⑮**）

全長12cmである。木の股部を使用し、片方を長くもち片方を短くし、長い方は2面からカットを受けているが、短い方は1面のカットだけである。根元の方は欠損しているため不明。

棒状具（**⑯**）

全長29.1cm、全面にわたって面取りが施され、上端部五角形、胸部六角形、下部七角形であり、上端部では幅が7mm程であるが、胸部から下部にかけては約1cmほどとなり、やや太くなる。上端部は丸く面取りが施され、上端部より7mm程下がった所で、幅8mm、深さ3～4mm程にえぐりを加えた箇所がある。下端部は先端をとがらせる様に面取りがなされている。

箸（**⑰**）

1点出土した。残存長21.4cm、上端部は断面七角形を呈し、幅が4.5mm、胸部は断面四角形を呈し、幅1.5mmほどで、胸部がかなり太くなっているものである。上端部は欠損しているが、下端部は残存する。

板状木製品

板状木製品は大小あわせて4点出土した。**⑱**は、一辺全長29.9cm、残存幅4cm、厚さ5mmである。直径3mm程のクギ穴が、4箇所に認められる。板の両角が、斜めに削られており、折敷の底板の可能性が高い。**⑲**は、一辺全長14.3cm、残存幅2.7cm、厚

さ3mmで、欠損している。⑩は、一辺全長144cm、残存幅2.8cm、厚さ3.5mmである。⑪・⑫とともに2mm～3mm程のクギ穴と思われる穴が穿たれている。⑩の左側面には木クギが残存している。⑪・⑫は、折敷の側板ではないかと考えられる。

曲物の底板（⑩）

直径10.5cmの円形のものが二つに折れたものである。厚みは約6mmであり、クギ穴と思われる削りとられた部分が2カ所認められる。中心部にある穴は、人工的なものではなく、フシなどが朽ち果ててあいたものである。⑩は、残存長12.0cm、残存幅2.8cm、厚さ5mmの板で、周囲はすべて欠損している。カーブからみて曲物の底板かと思われる。

その他の板状木製品

クギ穴と思われる痕跡のある磨滅した板状⑪や、表面に削り跡を残した厚めの板材⑫などがある。

柱状木製品（⑬）

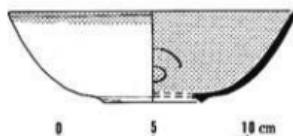
⑬は、全長23.8cmで断面形はだ円形を呈する。一見、磨製石斧と思わせるような木製品である。最大幅は5.4cmで一方の端はやや細くなり幅2.5cm程となる。この細い側は、敲打によってつぶれたような感じを受ける。表面にフシが見えるが全体にわたって面はきれいに磨かれているかのように滑らかである。

木簡

幅の狭い板状の木簡については、検出時に墨痕を認めたので、奈良国立文化財研究所に鑑定を依頼したところ、墨痕はあるが判読できなかったとのことであった。

（2）土器

黒色土器の椀は、6分の1程の破片であるが、口縁部から底部まで残存し、復原径15.2cm、高さ4.8cmを測る。口縁部外面と内面を黒化させた黒色土器A類で、口縁部は内弯し、低い高台を有する。外面はヘラで調整し、口縁部と高台を横ナデ。内面は見込みと体部を別々に細かいヘラミガキを施し、その上から体部に渦状暗文を入れる。平安時代も9世紀末から10世紀初頭頃のものと考えている。



第1図 黒色土器椀実測図

第5章 結 語

今回の調査では、祭祀用木製品が第6層中に包含されていることが確認できた。この第6層は、西側（湖側）に落ち込む層で、この落ち込みの上に第5層が堆積している。木製品には土器が共伴していないので、詳細な年代を決めたいが、第5層中には平安時代前期（9世紀末～10世紀初頭頃）の黒色土器碗があったことから、この黒色土器の年代より新しくなることはないものとみている。県内の他遺跡の出土例などからみて、大きく9世紀代の木製品とみてよいであろう。

尾上遺跡では、昭和57・58年度の調査においても、やはり同様な祭祀用木製品が大量に出土している。^②これら調査地点は、互いに近接した場所であり、遺物の出土した層位も、標高もほぼ同じである。おそらく、同じ条件下で堆積したのであろう。今回の調査では、特に祭祀用木製品の出土状況に注意を払った。その結果は、すでにみてきたように、各木製品がまとまりをもった状態で検出されたほか、個々の木製品についてみると、いずれも多少の磨滅（使用によるものではなく、水中など漂って木が腐って角がとれたもの）を受け、丸味を帯びていることが観察された。また、第6層からは、祭祀用木製品以外は、生活の場で用いられる土器類が一片たりとも出土していないことも特筆されよう。

以上のような出土状況から推定できることは、祭祀用木製品が水面を漂って堆積したことと、その使用の場と多少へだたっているであろうということである。出土した土層からみて、調査地は平安時代前期は湖辺の水中であったのであろう。おそらく、余呂川の河口部か、尾上の湖辺に、祓所のような祭場があったものと考えられる。

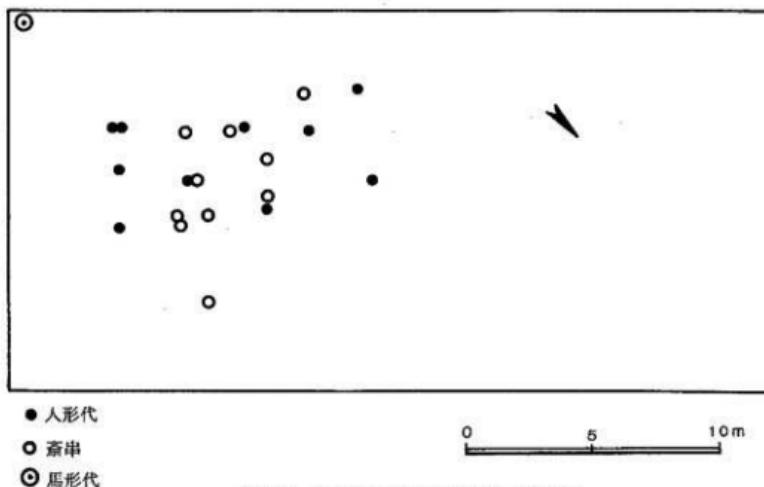
こうしたことを推測するうえで注目されるのが、馬形代の表面に書かれた文字である。馬形代には、馬の横顔と「黒毛口」の三文字が墨書きされている。文字のうち「黒毛」の二文字については、はっきりと判読できるが、三文字目については墨痕はあるものの残存状態が悪く読みづらい。しかし、文字の偏の部分が「示」と読めることと、『延喜式』の四時祭の条や大祓の条で、馬形代が大祓を行う際に使用されたと記されていることなどから、「祓」と判読することも可能で、かつ妥当なものと考えている。

尾上遺跡の性格と祭祀の実態については、隣接地の出土遺物の分析を抜きにして語ることはできないが、湖北における律令体制下の標式的な祭祀遺跡であることは、こ

これまでの調査の概要からも十分にうかがい知ることができよう。

註

- ① 山崎清和「湖底遺跡で多量の斎串を検出」（『滋賀文化財だより』No.84 滋賀県文化財保護協会 1984）
- ② 丸山竜平「湖北町今西地先発掘調査」（『びわ湖と埋蔵文化財』 水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部 1984）



第2図 人形代・斎串・馬形代出土分布図

図 版



調査前風景（北側より）



上層部掘削作業風景（南側より）



中層部掘削作業風景（南側より）

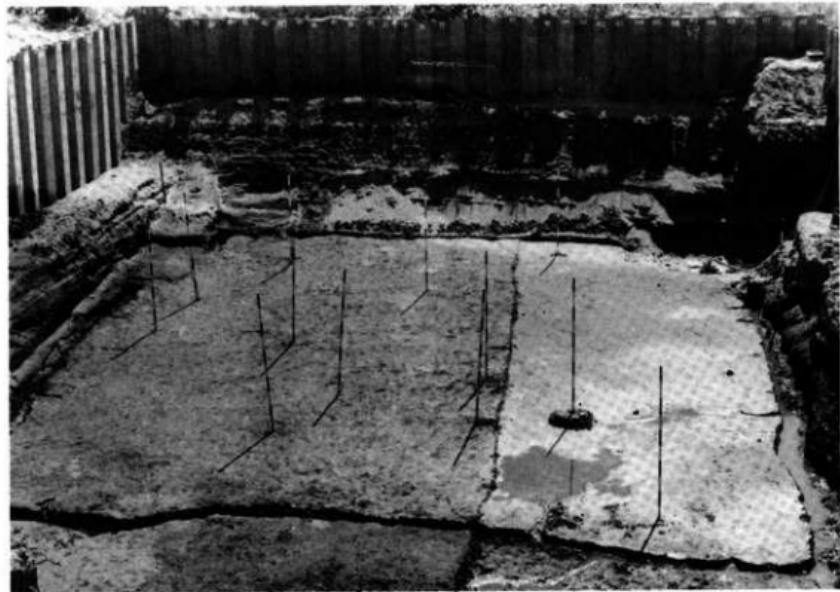


中層部掘削作業風景（北側より）

図版三 尾上遺跡遺物出土状況

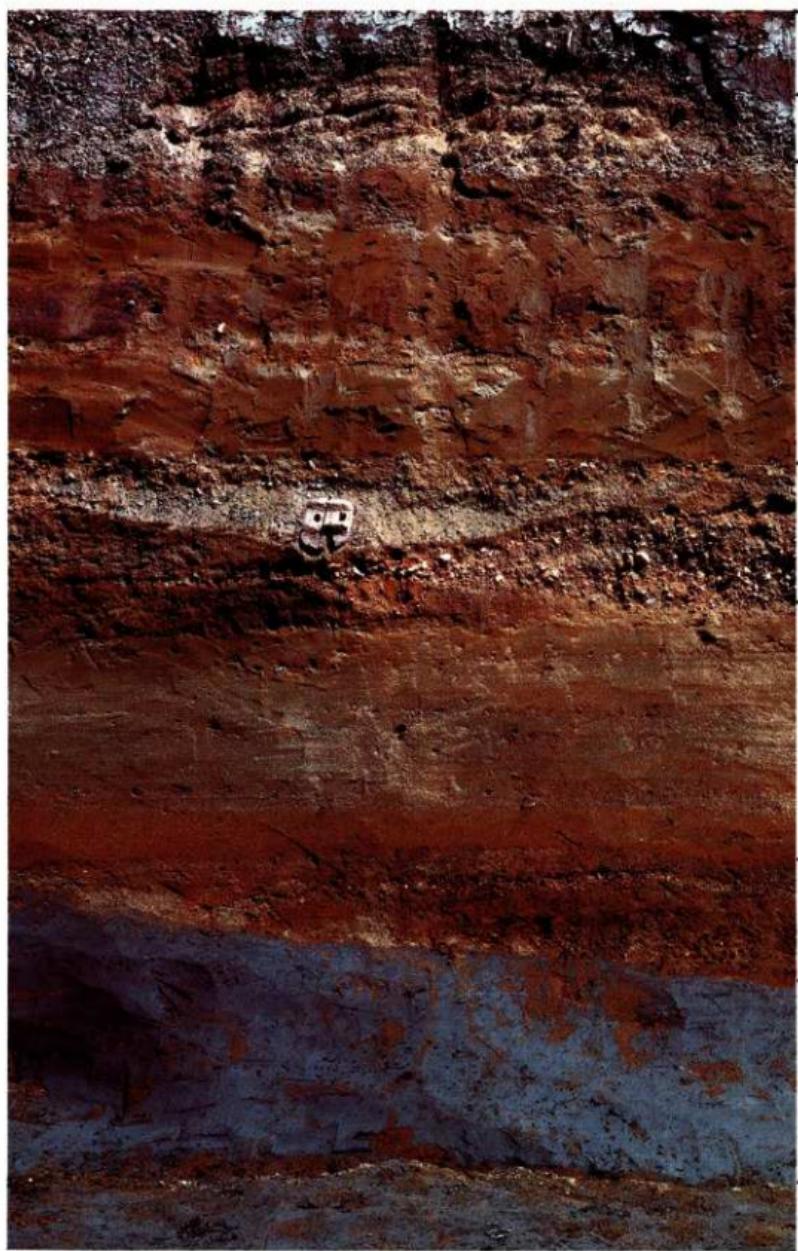


下層部掘削作業風景（北側より）



木製品出土状況（北側より）

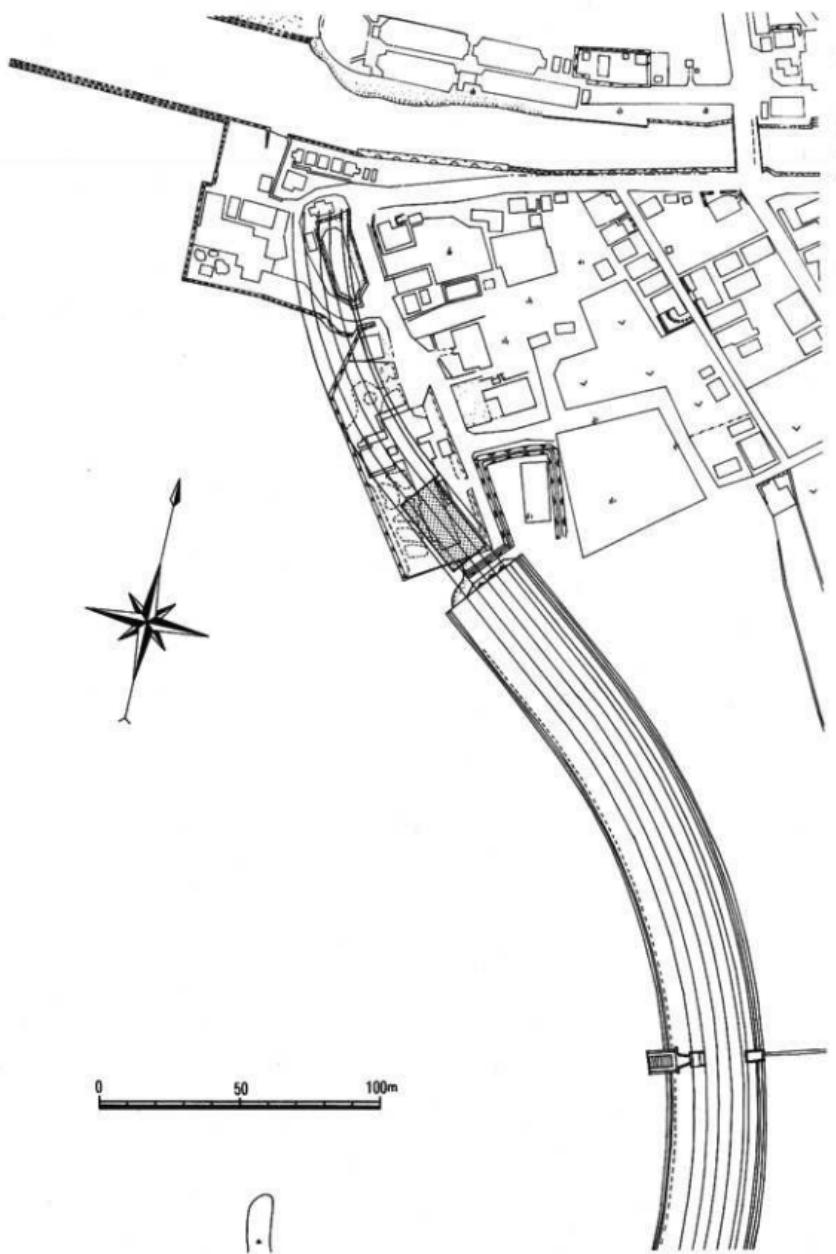
図版四 尾上遺跡南側壁面



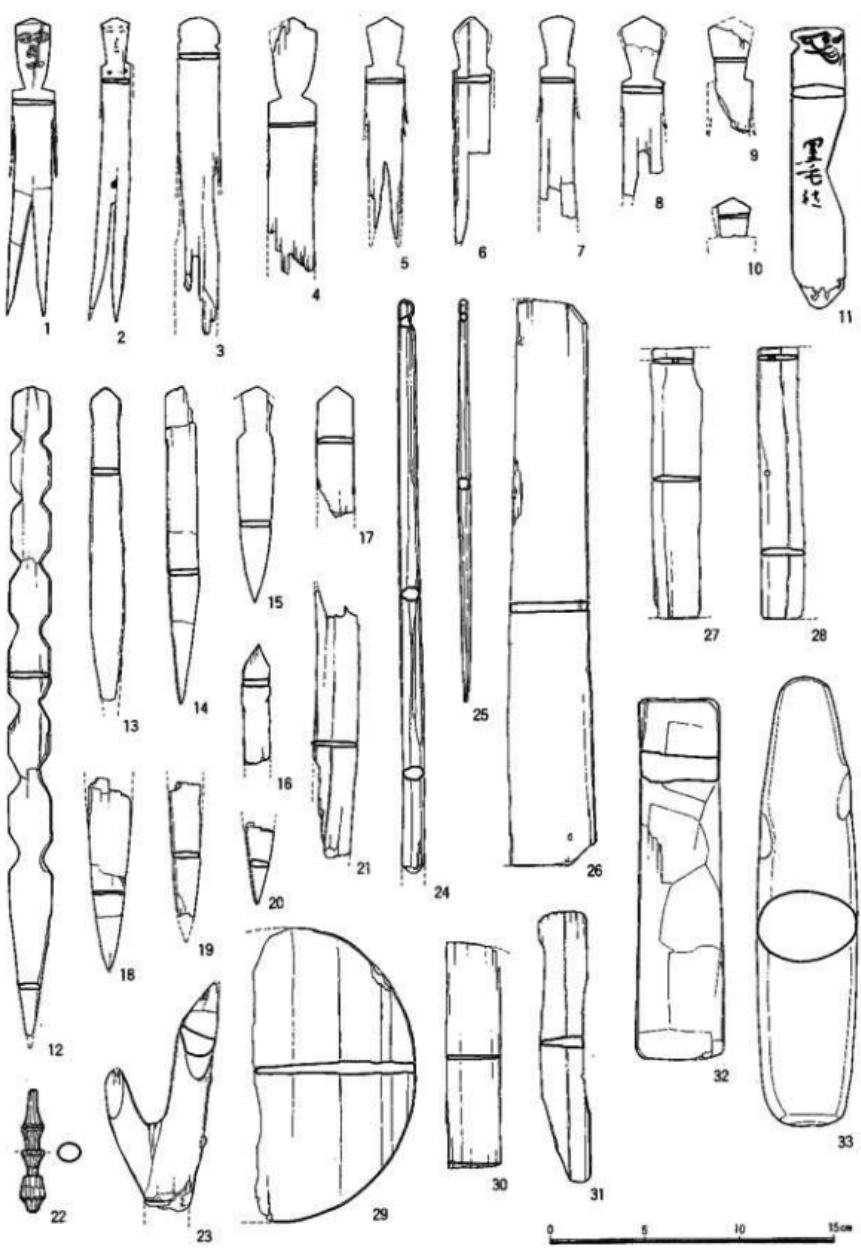




図版七 尾上遺跡トレンチ配置図



図版八 木製品実測図



尾上遺跡発掘調査報告書

—東浅井郡湖北町所在—

昭和 60 年 3 月

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会
助成 滋賀県文化財保護協会

印刷 富士出版印刷株式会社
